

▲明治15年の白川小学校の卒業証書と、初代校長江越礼太の肖像画

勉脩学舎

夏です。子供たちは長い休みを楽しんでいるころだと思います。今でこそ子供たちは当然の権利として教育を受けていますが、ここまでくるには、長い年月と多くの人の努力があったのです。

明治5年(1872)、わが国最初の近代的教育制度である「学制」が定められました。有田でもその年に白川小学校(現在の有田小学校)翌年には外尾小学校(現在の有田中部小学校)が開校しました。白川小学校の初代校長は小城藩士であった江越礼太(えごし れいた)です。彼は、早くから多久の草場佩川(くさば はいせん)の門下に入り、後に江戸の昌平校(しょうへいこう)で学びました。当時では最高の学府で、今でいえば東大のようなものではないでしょうか。そのような人が皿山の小学校の校長先生になったということで、「全国でも数少ない昌平校出身の校長先生と皿山の人びとは自慢したものだ」と、ある古老の話を聞きました。

江戸や長崎で、当時の最も新しい知識にふれた江越礼太は、その後、皿山全体の行く末を考え、明治14年(1881)、焼き物づくりを学ぶための「勉脩学舎(べんしゅうがくしゃ)」の建設を立案しました。

この勉脩学舎では、画学部、技術部、理学部の三つのコースがありました。建立趣意書の中に、「此校ニ於テ一人ノ名エヲ増スハ全国ニ於テ数千円ノ利ヲ増スナリ」とあり、実業教育の大切さを訴えています。

義務教育もままならない時期に、地方での職工学校として全国で最初の試みだと高く評価されました。江越礼太が亡くなり、100年になろうとしています。彼の残した精神は今も皿山の中に息づいています。

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.7

2 * 皿山びとの歌

皿山の風物

夏を過ごす



有田の夏は暑いですが、でも、ブンカ都市の佐賀平野とくらべると、蚊はあまりいません。今では、猛暑のころになると各家でクーラーが一斉に動き出しますが、そのようなものがない時代、皿山の人々はどのような夏の過ごし方をしていたのでしょうか。

有田は身近に山をひかえている環境です。ということは平地の部分よりは標高があり、涼しいといえます。古老の話によれば、泉山石場の採掘坑跡や白川の涼み台での避暑が一般的だったそうです。白川谷の川岸には、各会社や料亭の東屋（あずまや）が建ち、仕事を終えた後や休日に出かけていたわけですから、そこで気の合っ

た仲間や家族と涼をとっていたのでしょう。

夏の暑さを少しでも和らげようという気持ちは、今も昔も少しも変わりありません。場所をかえて、涼むのも一つの方法ですが、動かすことのできない家の中では、どのような涼み方をしていたのでしょうか。

冬の間用いた障子やふすまをはずし、夏になると連子戸（れんじど）とよばれるものにかえます。これは縦または横に一定の間隔をおいて取りつけた格子（こうし）の戸ですが、外に面して用いられる格子戸より、細かい格子になっています。

このほかには、すだれをかけた家もあります。これは、障子やふすまをとりはずしたあとにつり下げたものです。時によって丸めて上げることができます。

現在は洋風の家が多くなり、夏も冬も快適に過ごすことができますが、季節によって建具を替える昔の人のゆとりも捨てたものじゃありませんね。

方はざっと次の通りです。

〈材料〉

- ☆あん～小豆・5合、ざらめ・1kg
- ☆皮～むしパン粉・1.5kg、薄力粉・700g、塩・小さじ1杯

〈作り方〉

- ①むしパン粉、薄力粉、塩を適量の水で混ぜてこねます。
- ②ざっとこねたあと、30分ぐらいねかせて、もう一度耳たぶぐらいの柔らかさになるまでこねます。これで皮は出来上り。
- ③皮であんを包んで、ガンビャーの葉を下に敷いて強火で20分くらい蒸して出来上がります。今ではまんじゅうを作る家も少なくなりましたが、以前は子供たちがまんじゅうをもって近所の家へ行き、祇園参りに来てくれるよう、触れて回ったそうです。形は変わっても、大人も子供も楽しめる夏の夜の行事です。

（ご協力 百田カクさん）



ぎおん 祇園料理

この季節、有田の夜は毎日のようにあちこちの家で酒宴が繰り広げられます。祇園（ぎおん）とよぶこの祭りは各地区の氏神さまを祀る行事です。祇園本来の信仰的な要素が薄れ、現在は社交の場となっていますが、暑い夏の夜を楽しく過ごす手段として、先人の知恵からうまれた行事の1つだと思われます。

この祇園にも皿山独特の料理があります。1つはタラニジメ（タラの煮しめ）です。北海道産の干したポウダラを、お湯につけてもどし、肉をほぐします。それに細く切ったコブ（昆布）を加え、しょう油と砂糖で煮しめます。

もう1つ、祇園まんじゅうがあります。作り



◀有田町の献納海軍機「報国号」。泉山出身の古賀峯一氏が連合艦隊指令長官に任命されたことを記念して、町民の寄付を募って製作された零式艦上戦闘機。

有田製 ロケット兵器

和久陶平氏が語る 海軍ロケット兵器の秘密

太平洋戦争も昭和19年に入って、戦局はだんだんわが国に不利となり、軍も民間も何となく不安を感じ始めつつあったが、戦争には勝たねばならない、いや勝つと信じて国民はみんな同じ気持ちで苦しい生活に耐えていた。こうなってくると、だれもが「起死回生の妙手はないものか」と「掘（つか）むべき藁（わら）」を求めるのは当然で、特に空襲に猛威をふるう爆撃機B29への体当たり肉弾攻撃も効果は上らなかった。帝国海軍では、越野長次郎技術中佐を設計主任として名古屋の三菱航空機や三菱兵器で、ドイツで設計試作中のロケット飛行機メッサーシュミットMe-163を原型にした機体の設計と燃料の研究に乗り出し、1年もたたない早さで滑空テストと量産を開始しようとするところまで来た。

燃料製造装置に適した有田磁器

この燃料は全国の主要化学工場で生産可能であったが、その製造装置は耐薬品性の優れた磁器以外に材料がなく、有田の陶磁器メーカーも

昭和から平成へと新しい時代になり、もはや、“戦後”という言葉は死語になりつつあります。しかし、現代人の一生を語るとき避けて通れないのが戦争であったと思います。文字として残らない部分の有田の戦争体験を語り継ぐことも我々の仕事だと思っています。終戦の日を迎える8月を契機にこれから2回にわたり、中樽在住の和久陶平さんに語っていただきました。

名古屋地区の各社と共に、その一翼を担うことになった。

そこで〇に呂（ロケットのロ）の1字を入れて、㊦（マルロと読む）を、この一連の秘匿符号（ひとくふう）とした。

筆者はこの㊦に関する記録を書くに当たって、かなり記憶してはいるものの、より正確を期して、㊦に関与された現岩尾磁器の岩尾熙（ひろむ）、現華山の山本、元工栄社の田代、元香蘭社の岸川4氏の貴重なお話も伺った。が、某日、有田町公民館の図書室で、内容も確かめないうちになんか「別冊・文芸春秋185号」を借りて読んだら、柳田邦男氏のルポ「零戦（ぜろせん）燃ゆ」の中に、なんと『秋水』（㊦飛行機）についての詳細な記述があるではないか。

驚喜（きょうき）して参考にしたが、これは亡くなられた㊦関係諸先輩のお引き合わせに違いないと感じた。

秘密兵器の製作に多数の犠牲者

三菱名古屋航空機製作所と同発動機研究所で



4 * 血山びとの歌

▶香蘭社で働いていた女子挺身隊。海軍の管理工場となった香蘭社には、昭和19年ごろから武雄中学校・武雄高等女学校の生徒が、学徒動労隊・女子挺身隊として働きにきていた。



は、この『秋水』の機体やエンジンの設計、製作には筆舌（ひつぜつ）には尽くしがたい努力が払われ、しかもマグニチュード8の巨大地震とB29の徹底的な爆撃に数回襲われて、㊦工場や実験場は破壊され、貴重な技術者と、従業員は挺身隊（ていしんたい）の中学生や女学生まで、多数の犠牲者を出しながら、日本最初のロケット飛行機をわずか1年間に正式テストまでこぎつけたのは驚くべきことで、感嘆せざるを得ない。

このような執念、才能、努力が戦後の経済成長の原動力になったのであろう。

これに比べて、地震も空襲もなく、苦労はしたが㊦磁器を懸命に製造さえしていれば良かった有田の我々は何と恵まれた環境であったか大いに感謝せねばなるまい。

サンダルやバターの配給に当惑

㊦は最高の兵器として重視されたので、最優先的に物質の配給を受けたが、それでも苦戦の無資源国では、なかなか必要な資材が入手出来



▲現在の二区公民館の所にあった有田製陶所

ず、かえって「サンダル」や「純粋雪印バター」などを大量に送ってきたりした。

当時の質素な日本人はバターなどは余り賞味する習慣がなく、配給を希望する従業員がなくて往生した。有田製陶所では和久兄弟がジャガイモなどに塗って長い間かかって始末した。

ロケット式推進装置の新戦闘機

さて上記諸氏のお話や文春の記事によれば、戦時中の陸海軍が敗戦を一挙にばん回するため、ドイツの協力を得て、唯一のB29撃墜用として考案した『秋水』（J8M1）と命名された航空機は、乗員1名、短い胴体、先細りの中広後退翼で、垂直尾翼はあるが水平尾翼のないいわゆる無尾翼機で、ロケット式推進、2種の燃料をポンプで送って反応させ、1800度の高温高压ガスを噴射して時速8~900kmの超高速飛行。離陸直後車輪を落して4分間で高度12,000米まで上昇、40ミ機関砲で3分間交戦してB29を攻撃、燃料を使い果たしたのちグライダー式に降下して櫓（そり）をおろして着陸するよう設計された、いかにも日本らしい猪突猛進的（ちよとつもうしんてき）な戦闘機であった。

潜水艦で運ばれてきた極秘資料

このロケット燃料は、甲液を『㊦甲』と称し「濃度80%の過酸化水素」（ちなみに同質の消毒用オキシフルは3%）、乙液を『㊦乙』と称し「液化ヒドラジン」（無色発煙性液体の還元剤）、「メタノール」、「水」の混合液で、この両液合わせて5~6分間に2トンの燃料を消



▲有田焼製手榴弾。鉄の不足で磁器が見直された

費する『秋水』は昭和20年9月までに1,300機を整備する計画であった。

またこの燃料を製造する装置と、これに必要な耐酸磁器はドイツが開発したもので、その設計図や磁器の見本がぜひとも必要となった。「当時日独相互間の極秘資料を交換するため伊号潜水艦が日本とドイツの間を敵の制空権下に3ヵ月もかかって往復し、2隻のうちの『さつき2号』は行方不明になったという秘話」は有名であるが、巖谷英一中佐がドイツの『Uボート』と『伊29号』潜水艦を乗り継いでやっと19年7月に②の図面や見本の磁器破片を持ち帰った。

我々も小倉の東洋陶器で、これらを見て参考にしたが、そのドイツの耐酸磁器よりも有田の磁器の方が優秀で大いに面目を施した。

秘密兵器の研究者にも召集令状

戦争の敗色いよいよ濃くなった昭和20年に入り、岩尾の矢野氏に召集令状が来た。入隊先は佐世保相浦海兵団。

矢野氏は岩尾磁器で社長が出征不在の留守を預ると共に、同社の③を代表する専務である。そのため、これには困って、同社でも対策を講じられたろうが、我々も仲間として何とか協力しようとした。私は海軍監督官事務所へ陳情することを考え、交渉相手は豪放磊落（ごうほうらいらく）な平島大佐であろうから、これに対応できるのは山本火鉢の山本頼一老人しか居られないので、御承諾を得てお供をした。

予想の通り御二人の対談は風格さえ感じられ、

若僧の我々風情の及ぶところではなかった。

これだけで効果があった訳でもなからうが、矢野氏は数日にして、地獄の最下級水兵から無事に娑婆（しゃば）へ帰還したのであった。だから山本氏は、矢野氏にとって「命の恩人」であったかもしれない。

これに引きかえ山本哲郎氏は、④開始後の召集で、父上頼一氏の努力にもかかわらず不運にも陸軍であったためか、除隊出来ずたいへんな御苦労をされたが、終戦後無事に帰還されたので仲間も喜んだことである。

初の飛行テストと犬塚豊彦大尉

しかし、そうこうしているうちに月日はどんどんたち、我々の納入した苦心の装置はどうなっているのか全くわからなかったが、有人ロケット機『秋水』の滑空テストには成功し、実装正式飛行が神奈川県追浜で行なわれたのは、なんと終戦1ヵ月前7月7日。

しかも飛び上がるや否やポンプの故障で失速墜落し、大失敗であったことは後で聞いたが、このとき操縦して殉職された横須賀海軍航空隊（『秋水』担当の312空）の分隊長、犬塚豊彦海軍大尉は佐賀市出身。くしくも筆者の母校旧制佐賀中学の7年後輩で、岩尾熙氏の同級生でもあった。

犬塚大尉は瀕死の重傷であったが、「この『秋水』は安定していて、振動もなく、操縦性の良い飛行機だ。早く実用化して欲しい」との言葉を残して絶命された。はたち代の青年にして、この立派な遺言には言葉もない。

（次号につづく）



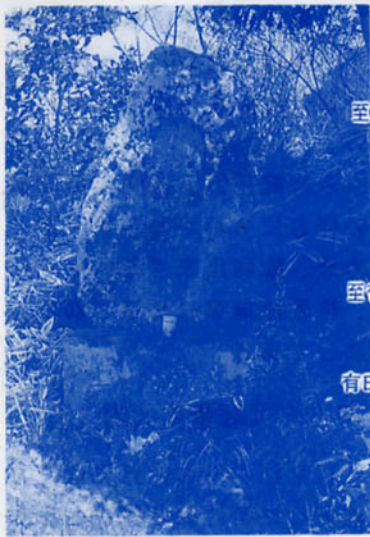
和久陶平(わく・とうへい)氏

プロフィール

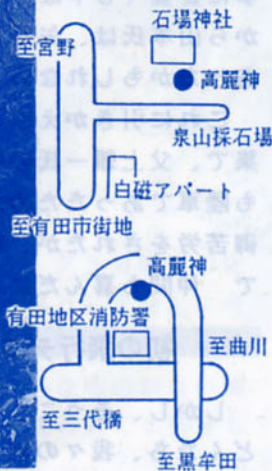
大正3年、有田生まれ。

旧制佐賀中学～関西学院大学卒業後、帰郷し有田製陶所に入る。現在、窯大・県技術アドバイザー。

6 * 皿山びとの歌 街角の歴史



高麗神



今回は「高麗神」(こうらいじん)について紹介します。豊臣秀吉の文禄、慶長の2度にわたる朝鮮出兵の際佐賀一円の領主であった鍋島直茂が朝鮮半島の陶工を連れ帰り、それが有田焼の創成となったことはよくご存知のことと思います。高麗神は渡来した陶工とその家族の子孫が勧請して祠ったものです。

町内には高麗神の石祠が2カ所残っています。1つは清六にある石祠ですが、これは風化が激しくその表面の文字を読みとることはできません。そして、もう1つは泉山の石場神社の拝殿横にある石祠です。こちら風化のため見づらくはありますが、「高麗神」という文字の陰刻を読みとることはできます。いずれも建立された年代についてははっきりしませんが、石場神社の石祠の傍らに奉献されている石灯籠には天保15年6月吉日(1844)と刻まれています。

また、高麗神の記述は「皿山雀」の中に見られます。これは享保16年(1731)に有田皿山について書かれたものです。その中に「高麗神と称して、後方に見える松の並んでいるところに勧請して、毎年春に祭りを行っている」とあります。

父母から語り継がれるまだ見ぬ遠い祖国をしのぶ祭りは、春の祭りという名とは裏腹に切なさの募るものではなかったのでしょうか。今では昇華してしまった悲哀を高麗神がひっそりとその名残りをとどめています。

拓本・裏打ち教室

町の中にはさまざまな文学碑や石造物があります。拓本はそれらの文字を墨で写し取る作業です。皿山の隠れた歴史を、傍らの石が語ってくれます。みなさまの参加をお待ちしております。

- ・日時 8月 7日(月)午前9時
8月19日(土)午後1時
- ・講師 志佐憚彦先生(前県立博物館)
- ・場所 泉山、歴史民俗資料館

※参加希望の方は下記まで電話でお申し込みください。 歴史民俗資料館 ☎43-2678

販売書籍の案内

- 山辺田古窯址群調査報告書 定価 5,150円
- 長吉谷古窯跡 定価 1,540円
- 小樽2号窯跡 定価 1,540円
- 有田町史 全巻定価39,000円
分冊定価 3,600円
- 別編[有田皿山の方言] 定価 1,030円

濃み筆のつぶやき

去年の今ごろは現場暮らしの毎日でしたが、今年は室内作業の日々です。子供たちが誇りに思うふるさと有田を語りつぐために、町内の方方のご協力を得て小冊子を出版する準備を進めています。対象は子供たちですが、大人の方にも楽しんでいただけるものと思います。

室内でも暑い、暑いとわめいているのに8月に入ると古窯跡の発掘が始まります。三十路も中ばにさしかかると、肉体労働はこたえます。かといって、頭脳労働もさして得意でなし…。20代の新人に知力、体力共に劣る私に残された道は、口しかないのかもしれない。(葉)

有田町歴史民俗資料館報 皿山びとの歌 No.7

発行年月日 * 平成元年8月1日
編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館
〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678